

《ドン・パスクワレ Don Pasquale》 ドランマ・ブッフオ 三幕

作曲年	1842年11月～12月	
台本	ジョヴァンニ・ルッフィーニ Giovanni Ruffini *	
初演	1843年1月3日 パリ、イタリア劇場	
自筆譜	ミラノ、リコルディ出版社文書館	
原作	アンジェロ・アネッリ Angelo Anelli 『マルカントーニオ殿 Ser Marcantonio』	
時代と場所	ローマ	
初演の歌い手	ノリーナ Norina	ジューリア・グリージ Giulia Grisi
	エルネスト Ernesto	マーリオ Mario (ジョヴァンニ・マッテーオ・デ・カンディア)
	マラテスタ Malatesta	アントーニオ・タンブリーニ Antonio Tamburini
	ドン・パスクワレ Don Pasquale	ルイージ・ラブラーシュ Luigi Lablache
	公証人 Notaio	フェデリーコ・ラブラーシュ Federico Lablache

構成

序曲

第一幕 ドン・パスクワレの屋敷の広間

- No. 1 導入部
No. 2 レチタティーヴォと二重唱 (エルネスト、ドン・パスクワレ)

ノリーナの屋敷の部屋

- No. 3 ノリーナのカヴァティーナ (ノリーナ)
No. 4 レチタティーヴォと二重唱 フィナーレ I (ノリーナ、マラテスタ)

第二幕 ドン・パスクワレの屋敷の広間

- No. 5 前奏曲、シェーナとアリア (エルネスト)
No. 6 シェーナと三重唱 (ノリーナ、マラテスタ、ドン・パスクワレ)
No. 7 シェーナと四重唱 フィナーレ II (ノリーナ、エルネスト、マラテスタ、ドン・パスクワレ)

第三幕

- No. 8 導入部の合唱 (ドン・パスクワレ、合唱)
No. 9 レチタティーヴォと二重唱 (ノリーナ、ドン・パスクワレ)
No. 10 レチタティーヴォと合唱 (ドン・パスクワレ、合唱)
No. 11 レチタティーヴォと二重唱 (マラテスタ、ドン・パスクワレ)
No. 12 セレナータとノクターン (エルネスト、ノリーナ、合唱)
No. 13 シェーナとロンド フィナーレ III (ノリーナ、エルネスト、マラテスタ、ドン・パスクワレ、合唱)

あらすじ

第一幕 - ドン・パスクワレの屋敷の広間 -

裕福な70歳の独身男ドン・パスクワレ・ダ・コルネートは、自分が勧めた縁談の話しを断り、未亡人のノリーナと結婚したがっている甥のエルネストを懲らしめようと考えている。そこでドン・パスクワレは、自らが結婚して、エルネストを屋敷から追い出してしまうおうと、花嫁探しを主治医のマラテスタに委ねる。ところが策略家のマラテスタは、こんなドン・パスクワレの傲慢な気まぐれを戒めてやろうと、ノリーナを加担させて、エルネストとの仲をとりもつ計略を企てる。修道院にいるマラテスタの妹ソフロニアとノリーナをすり替え、さらに従兄弟のカルロットを公証人に仕立てて結婚したかに見せかけた後、ドン・パスクワレを打ちのめして降伏させるという企みである。

- ノリーナの屋敷の広間 -

少し前にマラテスタがノリーナのもとへやってきて、急いで伝えて言った計略の話をもっと詳しく聞くために、彼女は部屋で待ち構えている。そこにマラテスタがやって来て、作戦を伝える。ドン・パスクワレをどのように騙す

か打ち合わせした後、二人は彼の屋敷へと向かう。

第二幕 - ドン・パスクワレの屋敷の広間 -

エルネストは、ドン・パスクワレから家を追い出され、相続権も奪われ、さらには親友のマラテスタが自分を裏切っていたことを聞かされる。愛するノリーナに困窮な生活をさせることはできないと、彼は独り遠い土地で生きていこうと思いつめている。

一方ノリーナは、エルネストとの愛を守るために、マラテスタの妹に扮して、まるで修道院から出てきた生娘のように、内気で恥ずかしそうに振る舞う。純真そうなノリーナに、ドン・パスクワレはすぐにも心を奪われ、さっそく結婚の契約に運ぶ。

カルロツが扮した公証人がやって来て契約を進めるが、立会人が一人では契約は出来ないと言い出す。その時、激しい勢いでエルネストが入って来る。出発の前に別れの挨拶を言いに来たと言うエルネストに、ドン・パスクワレは花嫁を紹介する。しかしその花嫁が、ノリーナであることに驚く。事の経緯が理解できないまま、エルネストはマラテスタの言うがままに立会人としてサインをし、ドン・パスクワレとノリーナの結婚が成立する。

ノリーナが妻になったと思い込んだドン・パスクワレは彼女に近づこうとするが、突然態度が変わり、彼女はドン・パスクワレをきっぱりと拒絶し、侮辱し、威嚇し始める。ノリーナの急変にドン・パスクワレが茫然となる中、彼女は主導権を握りながら、屋敷の使用人を集めて、彼らの昇給を決めたり、馬車やら家具やら好き勝手に物を注文し始める。自分の守ってきた世界が崩れて行く中、とうとうドン・パスクワレは、裏切られ、馬鹿にされたと怒りを爆発させる。

第三幕 - ドン・パスクワレの屋敷の広間 -

ノリーナがやって来たことで、ドン・パスクワレの屋敷の中は混乱している。召使たちがノリーナに命令された物を忙しく運んでいる間で、ドン・パスクワレは騒然とした家の様子を見て嘆く。そしてたった一日目にして積み上げられた請求書の山を読み上げながら、彼女にこの贅沢を止めさせなくてはと考えている。

そこに彼女が何やら忙しそうにやって来て、これから芝居見物に出かけると言う。ドン・パスクワレが家に留まるよう命令すると、ノリーナはまったく話を聞かず、それどころかついには、浮気女と怒鳴るドン・パスクワレに平手打ちをする。そして、わざと見えるように手紙を残して、ノリーナは部屋を出ていく。そこには今夜の逢引の約束事が書かれていた。

- 小さな森のあるドン・パスクワレの屋敷の庭園 -

仕組まれたことであるとも気づかず、ドン・パスクワレは、こんな事ならエルネストとノリーナの結婚を認めていればと後悔し、一日にして半年分のお金を失ったことや、夜の外出のこと、彼女から受けた平手打ちのことをマラテスタに打ち明け、逢引きの手紙を見せる。そして庭の森に隠れて、逢引きをしている花嫁の不倫現場を押さえ、ノリーナを屋敷から追い出してやろうと企てる。

ついにドン・パスクワレがエルネストとノリーナの結婚を許すと、じつはソフロニアがノリーナであったことが証される。ドン・パスクワレは彼らの計略にしてやられたと思いながらも、安堵する気持ちの中、幕が下りる。

*《ドン・パスクワレ》の台本作家

《ドン・パスクワレ》は、パリでのドニゼッティの秘書のような存在だったミケーレ・アックルシ Michele Accursi が、イタリヤ歌劇場の支配人と契約を結び、その後ドニゼッティに知らされました。原作に選ばれていたのは、アンジェロ・アネリ Angelo Anelli (1761-1820) が書いた《マルカントーニオ殿 Ser Marcantonio》で、すでに1810年にスカラ座でステーフアノ・パヴェージ Stefano Pavesi (1779-1850) が曲を付けて成功を収めた作品です。

現在、リコルディ社から出版されている《ドン・パスクワレ》の楽譜には、台本作家がミケーレ・アックルシと書かれています。しかし実際は、ジョヴァンニ・ルッフィーニ Giovanni Ruffini であったことが、1915年に出版された雑誌の評論で、アルフォンソ・ラッザリ Alfonso Lazzeri が発表した『ジョヴァンニ・ルッフィーニ、ガエターノ・ドニゼッティ、そして《ドン・パスクワレ》』で明らかにされました。

ルッフィーニは、この台本が《マルカントーニオ殿》のリメイクであり、しかもドニゼッティが勝手に(実際は、オペラ台本作家としては未熟だったルッフィーニの台本に、ドニゼッティは手を加えざるを得なかったのですが)手をいれ、たくさんの変更を加えたことから、台本に自分の名前を載せなかったのです。そしてミケーレ・アックルシがリコルディ社と《ドン・パスクワレ》の契約を結んだ際、台本に M.A.と書き入れたことから、アックルシが台本作家と思われてきました。